

# ほなほ歴史通信

第107号

2023(令和5).6.1

## 一六年目の抱負

この度、私、大金祐介は、大子町歴史資料調査研究員を拝命いたしました。

大子町歴史資料調査研究員は、大子町の歴史資料について、調査及び研究を行うとともに、その保存及び活用を図り、もって地域文化の向上に資することを職務としております。現在、私の他には、齋藤典生さん、藤井達也さんのお二人が務めていらつしやいます。光栄にも大子町歴史資料調査研究員を拝命したからには、お二人と共に、全力でその職務を果たしたいと思っております。今回は、大子町歴史資料調査研究員を拝命するにあたり、私の自己紹介を交えつつ、今後の抱負を述べたいと思います。

私は、平成五年（一九九三）生まれで、生まれも育ちも大子町です。地元の小中学校を卒業後、県立緑岡高校を経て、筑波大学人文・文化学群人文学類に入学し、歴史学（日本近代史）を専攻しました。大学で学芸員資格を取得し、博物館学芸員を夢見たこともありましたが、生まれ育った地域のために働きたいという気持ちがあり、大学卒業後は、茨城県庁に入庁しました。勤務地は水戸市ですが、大子町に住み、水郡線とバスで通っております。

私が大子町の歴史に興味を持ったのは、平成二〇年（二〇〇八）のことでした。きっかけは、我が家に残る明治二〇年（一八八七）

頃から昭和三〇年（一九五五）頃までの家業に関する史料を目にしたことでした。私は、それまで、歴史と言えば、天下国家の歴史であると思いついておりましたが、我が家に残る史料を目にしたことで、身近なところにも歴史があることに気付きました。そして、我が家の歴史を調べるうちに、我が家が先祖代々暮らした大子町にも誇るべき歴史があることに気が付き、大子町の歴史に興味を持ちました。

それ以来、私は、大子町の歴史の研究に取り組みました。そして、今年、研究を始めてから一六年目を迎えました。これまでの研究を踏まえ、私が掲げる今後の抱負は、次の二つです。

一つ目は、未解読の史料や新発見の史料を研究することです。大子町には、『大子町史』をはじめとする膨大な研究成果があります。そのため、大子町の歴史の研究は、既にやり尽くされたと思われるがちです。しかし、実際は、そうではありません。紙幅の都合により『大子町史』では取り上げられなかった未解読の史料もありますし、近年、代替わりや土蔵の取り壊しなどを契機に新たな史料も発見されております。私は、そのような史料の研究に取り組み、未だ明らかにされていない大子町の歴史を明らかにしたいと思っております。

二つ目は、大子町の歴史を分かりやすく発信することです。難しいことを難しく発信しても、これを理解できる人は限られてまいります。それでは、いくら熱心に研究し、新発見を得ても、宝の持ち腐れです。私は、平易な言葉遣いやビジュアルに留意し、本誌や「ふるさと歴史講座」などを通して、大子町の歴史を多くの方々に分かりやすく発信することに努めたいと思っております。私は、これら二つの抱負を胸に、大子町歴史資料調査研究員として、その職務を果たしたいと思っております。皆様におかれましては、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

（大金祐介）

## 野内真之介のこと

野内厚志

我が家に「北辰一刀流兵法箇条目録」が野内源五衛門家八代真之介兼則の遺品として残る。

目録の末尾には安政六巳未歳（一八五九）二月十五日の日付、「芳郷」の署名・花押とともに、野内真之介の名が記載されており、海保帆平芳郷の道場「振武館」で剣術修行をして所定の成果を挙げたことを伝えている。



この目録には水戸藩士高橋多一郎が関わっていたように思われる。「桜田門外の変」の首謀者として名を残す高橋は、下級武士の生まれながらその才を斉昭に認められて抜擢された水戸藩屈指の優れた人材であった。

高橋は、安政二年（一八五五）水戸藩民政の中核である郡奉行に昇格し管内巡察に出ている。

「北郡奉行日記」には九月二十六日上野宮村の旅沢家に一泊し、翌二十七日には大子村で一泊したと記録されている。当時大子村の山横目・庄屋は野内源五衛門兼明であり、その接待に忙殺されたはずである。主従八名の郡奉行一行

を村へ迎え入れる段取りは大変な気遣いだったろう。

その日二十二歳の真之介は、山横目兼明の継嗣として高橋に目通りが許されたと思われ、そして高橋が放つ学識・人格・能力に裏打ちされた圧倒的な存在感に大きな触発を得て、この後高橋に私淑するようになったと想像している。

さて、海保帆平芳郷は北辰一刀流千葉周作門下のもっともすぐれた剣士であり、天保十二年（一八四一）に水戸藩に五十石で仕官し水戸に住んでいる。しかし、水戸藩剣術師範だったとか水戸に道場をかまえたといった事歴は『水戸市史』では否定されているから、真之介は江戸に出て帆平の道場（安政元年江戸出府後に藩の開設許可が下りた「振武館」）に入門し三年程度修業をしたようである。このできごとは高橋の推挙・紹介であったと思われる。

真之介は、元治元年（一八六四）四月父兼明の死後を襲い庄屋に就任している。当時の藩内各地の若い庄屋たちの多くは尊皇攘夷派・天狗派であり、真之介も不安定な世情を背景に、能力に応じて身分制度を超え活躍できる社会の実現を望んだに違いない。真之介は、同年六月天狗派の一員として「大発勢」に参加し、八月には支藩宍戸藩主松平頼徳と重臣榊原新左衛門の指揮下に入って水戸城下や那珂湊の戦いに参陣した。十月幕府の説得によって千余名とともに投降したが、頼徳や榊原は切腹。真之介は佐倉藩預かりの後に伝馬町牢屋敷に入獄させられ、そこで死を迎えることとなった。

野内源五衛門兼則。名は真之介。幼名亮吾郎。また諱を兼利とも云う。玉照軒真岳浄光居士。

慶応二年（一八六六）獄中で病死。享年三十三。

（大子町大子在住）

【史料紹介】

左貫で発見された「佐竹義宣知行宛行状」

吉成家文書研究会

令和二年（二〇二〇）九月、大子町左貫にある吉成家の邸宅「旧吉成邸」から、同家に伝来するまとまった数の古文書（「吉成家文書」）が発見されました。そこで、大金祐介を始めとする有志が「吉成家文書研究会」を結成し、古文書の整理・調査・研究を進めています。「吉成家文書」は、これまで調査の手が入ることのなかった史料群で、一点一点が大子地域の歴史に関わる新たな知見を含んでいます。本稿では、「吉成家文書」の中でも最も古い文禄四年（一五九五）の「佐竹義宣知行宛行（あてがひ）状」を紹介します。豊臣秀吉の傘下に入り常陸を統一した佐竹義宣は、文禄三年に佐竹領の総検地を行います。これにより、翌文禄四年、佐竹領内の石高が確定し、佐竹氏は家臣一人ひとりに知行地を配分し直しました。知行地の立地・面積を通達するために佐竹氏が作成した「知行宛行状」が「吉成家文書」の中から発見されました。

一、五拾石也 さぬきの内

文禄四年<sup>（一五九五）乙未</sup>八月十八日人見主膳<sup>（藤道）</sup>（花押）

吉成藤兵衛との

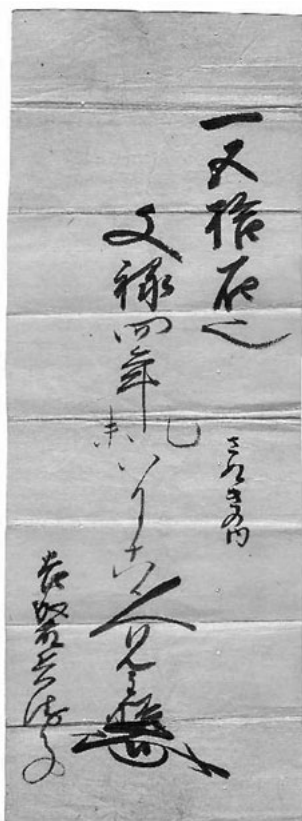
これは、吉成藤兵衛という人物に「さぬき」（左貫）という地の五〇石分を所領として与えるという内容になっています。本状中央下の「人見主膳」（藤道）という佐竹氏重臣が、この知行宛行状の差出人です。ただし、家臣一人ひとりに所領を与える主体となるのは、佐竹氏当主の義宣であり、人見主膳は佐竹氏に代わって

本状の差出人となっているに過ぎないので、この形式の史料は「佐竹義宣知行宛行状」の名で呼ばれています。

吉成藤兵衛が与えられた左貫の内五〇石は、別の史料によると、現在の「大子町左貫字萩塚にあつたことがわかります（「村々供奉人数士留帳」）。萩塚は、左貫の宿や「旧吉成邸」を見下ろす高台にある土地で、中世の領主居館が置かれる場所としてふさわしい立地です。検地を通じてその土地の所持が佐竹氏によって認められ、その権利証明書となったのが本史料なのです。

佐竹氏の文禄検地を通じて大子地域の武士に宛てられた「知行宛行状」は十通前後確認されますが、そのいずれもが写しとして伝わるものであり、原本は一通も残っていません。そのため、今回発見された本史料は、大子地域に関わる現存唯一の「知行宛行状」であり、町内に残る中世文書としても大変貴重なものです。

本史料の発見によって、地域の歴史に関わる新たな知見も加わりました。中世の左貫地域は「鋤柄（くわがら）村」と呼ばれ、江戸時代になると「左貫村」の呼称が使われ始めます。その転換点となったのは、江戸時代初頭の慶長・元和年間と考えられてきました（「水府志料」）。しかし、本史料には「さぬき」という地名が見られ、少なくとも中世最末期の段階では、「鋤柄村」の地名と並行して「左貫村」という呼称が使用されていたことが判明します。本史料は、「左貫」の地名が確認できる最古の史料であり、地名の変遷に関わる重要な情報を含んでいるのです。（文責：藤井達也）



「佐竹義宣知行宛行状」  
（「吉成家文書」）

## 保内郷の発展に貢献する地域リーダー

—「神永秀介翁効績書」の紹介—

吉成家文書研究会



本会では、大子町左貫の「旧吉成邸」に残されていた「吉成家文書」を調査している。「神永秀介翁効績書」は、その過程で見つかったものである。

佐原村の初代村長、神永秀介（一八五三〜一九三四）は、大子村初代村長の菊池武保、袋田村第二代村長の櫻岡敏とともに「保内郷三傑」と並び称された地域リーダーである。

神永家と吉成家は関わりがあり、神永秀介の娘だけが、吉成賢（第十、十二、十五代佐原村長）に嫁いでおり、たけの弟、三四郎は、助役として義兄の吉成賢村長を補佐した。佐原村では、大正一〇年（一九二一）に、神永の自治功労表彰式が挙行されており、効績書はそのために作成されたものと考えられる。

効績書には、神永家が、幕末維新の動乱や自由民権運動を経験し、地域リーダーとして、地域の発展に貢献する姿が活き活きと描かれている。こうした変革期を、保内郷の地域リーダーたちがどのように乗り越えていったのか、いま地方の変革期に直面している我々にとっても、学ぶべきことは多いのではないだろうか。

なお、紹介にあたり、傍線部分にふりがなを括弧〔〕で付すとともに、適宜句読点を補った。 文責：小松崎研（水戸市在住）

「神永秀介翁効績書」

効績書

本 籍 茨城県久慈郡佐原村大字初原八拾貳番屋敷

現住所 同上

士族

神永秀介

嘉永六年十月廿一日生

一、性質品行、平素ノ志行【しこう】

質性温厚、質実剛健ニシテ品行極メテ方正ナリ。

志操堅実【しそくけんじつ】ニシテ言行一致、勤儉力行ノ精神深く、平素、意ヲ地方自治開発、教育ノ刷新、道路ノ開築ニ用ヒ、衷心之レガ実現ヲ期シタリ。

而シテ、氏ハ夙【つと】ニ自由民権ヲ唱道シ大義名分ヲ明ニセントシ、烈公ノ知遇ヲ受ケ勤王家トシテ知ラレタル郷士神永信義翁ノ第二子ニシテ、嘉永六年十月ヲ以テ常陸国久慈郡初原村ニ生レ、随テ氏ノ家庭ハ固【もと】ヨリ純潔ナル忠孝節義ノ教養ヲ受ケ、殊ニ長兄信之介氏ハ、東湖先生ニ私淑シテ水戸学ノ神髓タル国体学ヲ修メ、氏モ亦同時ニ経世実用ノ学ヲ講シ、傍ラ福沢、中村、津田真道諸先生等ノ訳書ニヨリテ泰西碩学【たいせいせき】ノ新知識ヲ吸収シ、以テ後進ノ指道誘掖【ゆうえき】ニ努メタリ。然ルニ長兄信之介ハ、不幸ニシテ早世シカバ、其ノ家督ヲ相続シ、少壮ヨリ多数ノ家僕ヲ使役シ、盛ニ農業ヲ営ミ、森林ヲ経営シ、酒造業ヲモ兼ネ営ミタリ。

二、効績

明治七年、初原戸長ニ選バレ、明治十三年、久慈郡勸業世話役申付ラレ、能【よ】ク其ノ職責ヲ尽シ、慰勞トシテ県ヨリ金若干ヲ贈典セラレタリ。

明治十八年、久慈郡第二十五番学区学務委員トナリ、専ラ風教道義ノ鼓舞振作ニ努メ、文化ノ開発ニ尽瘁セラレタリ。

明治十九年、茨城県々會議員ニ当選シ、更ニ明治廿八年、同廿二年、同廿六年、同四十年、同四十四年ノ前後六回、何レモ無競争大多數ヲ以テ当選シ、廿有余年、県治ノ為ニ貢献セシモノ尠【すくな】カラズ、其ノ功、実ニ偉大ナリト云フベシ。

明治廿一年、初メテ市町村制ノ施行セラルニ方リ、時ノ郡長黒川春道氏等ト協議ニ与リ、利害得失、人情風俗等ニ詳細

ナル調査ヲ為シ、以テ新町村ノ分離廃合等ニ最善ノ努力ヲ尽サレ、殊ニ吾佐原村ノ依上村ト分レテ一村ヲ新設スルニ際シテハ、当時ノ知事安田定則氏ヤ郡長豊田滋氏等ト悉ク折衝協議ヲ遂ゲ、遂ニ依上村ヨリ分村シテ佐原村ヲ新設シ、銳意村治ノ改善發達ニ意ヲ注ギ、以テ今日ニ至レルモノナリ。此ノ分村タルヤ、市町村制發布後、全国中稀レニ見ルノ分村ニシテ、各県地方ヨリ其ノ記録ヲ要望セラレタルコト屢々【しばしば】ナリシ。

明治廿三年、佐原村ノ新設ナルヤ、之レガ村長ニ選バレ就職、以テ村自治ノ為ニ尽策經營セルモノ枚挙ニ遑【いと】マアラズ。就中、交通機關ノ改善ニ多大ノ私財ヲ投シテ之レガ改修ヲ施シ、栃木県大田原町ヨリ本県平潟港ニ達スル県道ノ本村大字佐貫初原ヲ貫通スル道路ハ、旧来、屈曲嶮坂【けんはん】多クシテ人馬ノ交通甚至難ナル個所多キヲ患ヒ、殊ニ大字佐貫字関ノ田和、大字初原字阿坪、大平、中ノ沢等ノ路面、最モ嶮惡ナリシガ、村内有志ヲ督励シ、自ラ設計ヲ為シ、私財ヲ投ジテ之ガ改修工事ヲ実行シ、今ヤ平坦砥【といし】ノ如キ、地方稀ニ見ルノ道路トナルニ至レリ。而シテ、本線路ノ一時町村道タラントスルヤ、屢【しばしば】出県陳情スル所アリ。為ニ遂ニ県道トシテ将来存置スル事トナリ、今日ニ至レルナリ。明治廿三年、久慈郡第二高等小学校ノ大字町ニ新設セラル、ニ方リ、其ノ費用ヲ寄付シ、県ヨリ賞状並木杯壹個ヲ下賜セラル。

明治廿八年、水戸大隊区徴兵参事員トナリ、又久慈郡軍人家族保護会委員長ニ推挙セラル。

明治廿七、八年、日清戦役当時ニ在リテハ、殆ンド寢食ヲ忘レテ時局ノ対策ニ没頭シ、産業ノ開發ト銃後ノ後援ニ努力シ、以テ邦家奉公ノ誠ヲ格セリ。

明治廿九年、郡會議員ニ當選就職シ、郡制ノ刷新ヲ企図シ郡

治ノ為ニ貢獻セシモノ実ニ多大ナリト云フベシ。

明治三十年四月、明治廿七、八年事件ノ功ニ依リ、賞勳局總裁ヨリ行賞セラレ木杯壹組ヲ下賜セラレタリ。

同年六月、廿七、八年戦役ノ際、軍資金ノ内へ金若干ヲ獻納セシニヨリ小野田知事ヨリ賞詞ヲ贈ラル。

明治三十一年、農商務省ヨリ茨城地方森林會議員ヲ命ゼラル。爾来、明治四十二年迄、同議員就職、地方森林經營ノ為ニ貢獻努力セラレタリ。

明治廿八年、茨城県保護会ヨリ慈善ノ趣旨ヲ翼賛セル功績顯著ナリトシ、特ニ名誉會員ニ登録セラル。

明治廿七、八年、日露戦役当時ニ在リテハ、軍資金恤兵【じゅつべい】部出征軍人家族保護会等ニ金品ヲ寄贈シ、以テ銃後ノ後援ニ遺憾ナク奉公ノ誠ヲ尽シタリ。

明治廿九年三月、農事奨励事項ノ実行、農村風紀ノ改良、農事改良ノ奨励ニツキ、成績顯著ナルノ故ヲ以テ、大日本農会總裁大勲位功三級貞愛親王殿下ヨリ表彰セラレタリ。

同年、佐原村県道改修工事ニ尽瘁セラレシ功績偉大ナルモノアリトシ表彰セラレ、表彰状並銀杯壹組ヲ贈呈セラレタリ。

明治四十三年、村自治財政ノ為ニ、百年ノ計ヲ樹立セント欲シ、自己所有ノ山林參拾七町步余ヲ、僅ニ実費金壹千參百円ヲ以テ村へ提供シ、時ノ村長吉成誠氏ト計リ、村基本財産トシテ之レニ杉及檜ヲ植林シ、現ニ拾壹万壹千本ノ一大森林ヲ造成セシメタリ。

水郡鉄道敷設ニ當リテハ、県議トシテ全ク政党ヲ超越シ、毀譽褒貶ヲ顧ミズシテ水郡鉄道敷設ニ尽瘁シ、県北宝庫ノ開發ニ献身的努力ヲ傾注セラレタリ。猶大正八年三月九日、保内郷一町九ヶ村長ヨリ、地方ノ輯睦【しゅうぼく】ヲ図リ、産業

ノ振興ニ努メ、実業教育ノ普及ニ意ヲ致シ、地方開發上、其ノ功勞顯著ナリシヲ以テ、記念品トシテ花瓶一個ヲ贈ラル。

## 「奥久慈胡瓜」の盛衰（中）

下重康男

本誌第一〇六号では、「奥久慈胡瓜」の誕生から昭和三十七年（一九六二）までの動きを概観した。当初は、ソバに代わる煙草作のあと土地利用と京浜市場の台所的役割を果たすことをねらって始まった「奥久慈胡瓜」であるが、三十七年には既存の産地と肩を並べるほどの有力な産地にまで成長し、最盛期を迎えることになる。

**昭和三十八年** 農研グループの活動や先進地視察が行われるなかで生産者が増加し、常陸太田市、那珂郡、久慈郡の作付面積は三七八町歩に拡大し、総出荷目標は四九万二千箱（一箱十キログ）が見込まれた。大子町の作付面積は四割に当たる一五二町歩となり、前年が十五町歩であるから約十倍の急拡大をみせた。品種では、従来の地這胡瓜「ときわ霜しらず」のほか、この年から急ピッチで普及したネット栽培胡瓜の「ときわ新一号」「ときわ新一号」が加わった。播種期は五月中旬、六月中旬、七月中旬に統一され、共同出荷が行われた。とくにネット栽培の胡瓜は品質が良かったため、「奥久慈胡瓜」は各市場で大好評を博したという（『農政だいいご』第八号、昭和三十八年十月一日発行）。なお出荷時の規格は、少なくとも三十六年までは松、竹、梅、鶴、亀等八等級に分けられていたが、その後、大きさがL、M、S、品質がA、B、Cのアルファベット表記の分類に変わっている。

市場の信用を一層高めるため、同年八月三十一日には大子町農協（蔬菜部会）が主催する形で東京築地市場の視察が行われた。約百余名の生産者が大型バス二台に分乗して上京し、市場で高く評価されるためには何が大切かを市場の係員から聞き取った。各産地の胡瓜を実際に目にする機会もあり、厳正な選果が重要であること等を学んでいる（前掲『農政だいいご』）。

**昭和三十九年** 『農政だいいご』第十四号（昭和四十年一月一日発行）によると、この年の作付面積は四十六町歩余であり、八万七六二〇箱を出荷し、販売総額は二千八百万余円にのぼった。反収は約六万円、一箱は約三二〇円である。前年に比べると作付面積が著しい減少をみせている。その事情は明らかでないが、地這胡瓜の作付が減ったためではないかと思われる。同『農政だいいご』には、二反歩をネット栽培した松田茂氏の経営収支が紹介されている。それによると、支柱竹、ネット、肥料、農薬等の資材費は多額になるが、「諸経費を差引いても水稻をはるかに上回る収入を得」という。出稼ぎによる日給が手取りで七、八百円の当時、「一日当りの労働報酬に換算しても、相当のもの」だとも伝えられている。この例を踏まえると、ネット胡瓜は、品質、収量、収益性、市場性において地這胡瓜よりはるかに優位であったと考えられる。

**昭和四十年** 次のような指摘がある。栽培の「最盛期といわれた三十八年から四十年にかけては、…福島の人達が、バスで視察にきた。栃木からも千葉からもきた」（『農政だいいご』第四十号、昭和四十四年十一月一日発行）、と。視察先には選ばれた大子町は、この時期、まさに胡瓜栽培の先進地になっていた。大子町農協管内では、七、八月にかけての十日間に七五五箱もの「奥久慈胡瓜」の出荷を達成し、繁忙を極めながらも生産者と農協とが連携して良品を京浜市場へ供給し続けた。順風満帆かと思われた九月四日、悪夢が襲った。午後五時七分からの約二十分間、田野沢、初原、槇野地、浅川、矢田、川山、池田、下野宮、大生瀬、外大野等の広い地域が、りんご大から梅干大の激しい降雹に見舞われた。収穫目前の水・陸稲、蒟蒻、果樹等に甚大な被害が及び、蔬菜類の中心にあった「奥久慈胡瓜」も例外ではなかった。胡瓜は跡形もなく叩き折られ、地に伏した。この降雹による被害総額は二億七千八百万円にものぼった（『普及のあゆみ』平成六年版）。まさに未曾有の災害であった。（大子町下野宮在住）

# 防除暦の作成とその役割 (下の二)

— 特産品・りんごのルーツを探る (二〇) —

防除暦の実例を示そう。筆者の手元にある六年分の防除暦のうち、「昭和四十一年度 りんご病害虫防除暦」の一部を下段に掲げた。まず項目に着目すると、左端から順に「散布回数」「散布時期」「防除法」「水○○ℓ当り薬剤量」「○○a当り散布量」「適用病害虫」「注意事項」の七項目が並んでいる。この形を他の五年分と比べると、「防除法」と「水○○ℓ当り薬剤量」欄が「標準農薬(水○○ℓ当)」に統合されて六項目になっている点、昭和四〇年度の防除暦についてのみ「注意事項」が「参考事項」になっている点の違いとして挙げられる。また興味深いのは、四七年度防除暦の「○○a当り散布量」欄が「SS」(スピードスプレーヤー)と「動噴」(動力噴霧器)の二つに分けて表示されていることである。これは、四〇年代後半になると大子町でもSSを駆使した防除方法が広がりを見せた(本誌第九六号参照)ことの反映であろうし、SSは作業効率が高いため薬剤の量が少なくて済み、分けて表示する必要があったのであろう。例えば、「芽出し一週間前まで」の「○○a当り散布量」は動噴四〇〇ℓに対してSSは三〇〇ℓ、「芽出し一週間後」は四〇〇ℓに対し二五〇ℓという違いがみられる。

例示した昭和四十一年度の場合、「発芽一週間前まで 三月二七日まで」の特別散布から始まり、「前回散布より二週間後 九月一日頃」の一五回目の散布で終了した。計一六回である。他の年度についても、防除が三月下旬(二〇日〜二七日)から九月中旬(八日〜十五日)までの間に行われている点は共通しているものの、散布回数は僅かだが減っている。ちなみに、四四年度及び四七年度は一四回である。なお、最終散布日は遅い場合でも九月一五日だが、この頃は早生品種の収穫が始まる時期でもある。晩生の品種

「昭和四十一年度 りんご病害虫防除暦」

散布回数	散布時期	防除薬	水100ℓ当り薬剤量	100ℓ当り散布量	適用病害虫	注意事項
1	発芽一週間前まで 3月27日頃まで	殺菌油乳剤 4% 葉液 95% (250倍)	殺菌油乳剤 4ℓ	350ℓ	カイガラムシ類 ハダニ類 アブラムシ類 ハマキムシ類	1. 樹上越冬害虫(越冬)に多い樹で散布する。 2. 樹下に落葉の処理、粗皮削り、ウドンコ病の被害収の要法を行なう。
2	発芽当時 4月5日 〜10日頃	DDT水和剤 50% 1,000倍加用 β-CT水和剤 5% 330倍液	①DDT水和剤 250g ②β-CT水和剤 300g ③農薬剤 20cc	350ℓ	アブラムシ類 ハマキムシ類	1. アブラムシ類、ハマキムシ類の初期防除として効果がよいので、ていどに散布する。 2. 樹内を巻取り生育の阻害と虫の発生状況を確認しておくこと。
3	発芽10日後 (展葉初期) 4月15日 〜20日頃	スミチオン水和剤 25%600倍液	①スミチオン水和剤 170g ②農薬剤 20cc	350ℓ	アブラムシ類 ハマキムシ類	1. スミチオン水和剤を使用する場合 1.500倍(水100ℓ当り70cc)とする。
4	開花直後 (花蕾期) 4月25日 〜27日頃	乳剤液 330倍 加用コラーン40 0倍液	①コラーン250g ②生石灰 300g ③殺菌剤 300g ④農薬剤 20cc	400ℓ	ウドンコ病 ハマキムシ類	1. ハダニの発生が多い樹では殺菌剤を加用する。 2. 殺菌剤はコラーン、イソプロピルアルコール(1000倍(100g))、マイトランク水和剤(1500倍(70g))
5	落花直後 5月5日 〜10日頃	エストロックス乳剤 1,000倍液加用 ノックメートF75 500倍液	①ノックメートF75 200g ②エストロックス乳剤 100cc ③農薬剤 20cc	400ℓ	ウドンコ病 ハンセン落葉病 アブラムシ類 ハマキムシ類	1. りんごハダニ類、アブラムシ類の越冬防除がある。 2. エストロックスに代えてエリナセン乳剤(1,000倍(100cc))を使用してもよい。
6	落花10日後 5月16日	ノックメートF75 500倍液	①ノックメートF75 200g ②農薬剤 20cc	450ℓ	粗皮落葉病 ウドンコ病	3. ハマキムシ類、エリナセン乳剤の発生期でDDT水和剤(50%) 1,000倍液を加用する。

には依然防除が必要であっても、収穫するりんごに影響が出ないように散布は抑えるとの配慮が働いたようである。(齋藤典生)

## 勤儉貯蓄に駆り立てられる銃後の人たち

—「いはらき」新聞に見る戦争時代の女子(四)—

昭和十三年(一九三八)四月の閣議決定から始まった国民貯蓄奨励運動は、一六年六月の国民貯蓄組合法施行を機により強化され、戦時貯蓄の増強が図られた。戦争遂行との関連では、「この国家総力戦に老幼男女の差別なく、また地位の如何を問はず最も容易に、しかも国民全部が参加し協力するの實を挙げ得る途の一つは国民貯蓄を励行することである。…従つてこれに参加協力することは、銃後国民として将に非常時局下の国家に対する最も重要な御奉公である」(情報局編『国民貯蓄組合法解説』昭和一六年一月発行)、と位置づけていた。貯蓄目標額は一六年度から二〇年度にかけて一七〇億円、二三〇億円、二七〇億円、四一〇億円、六〇〇億円、と加速度的に引き上げられていった。

目標額は都道府県、市郡、町村単位で配分された。女子地方でも、各町村が首長を旗振り役にして目標額達成に向け邁進する。

昭和一九年二月五日付茨城新聞夕刊は、小学校の例を伝えた。『貯蓄で米英撃滅』ヨイコの合言葉は文字通り砲弾化されてグングン上昇してゆく—奥久慈依上村国民学校では小野瀬校長着任以来全児童の貯蓄戦に拍車がかけられた、一枚の紙にも、一本の鉛筆にも又思ひがけないお小遣にも無駄と冗費を一掃してヨイコに正直な創意工夫が盛られ僕達の今年の貯蓄目標四千五百円は何が何でも倍額完遂へとひたぶる熱意をこめて一銭のしめくりにも真剣だった、その戦果は遂に報いられて去月末日までの調査によると驚くなかれ実に一万円に達してゐた(後略)

なお大蔵省は、同年六月、国民貯蓄増強運動に功績があったとして小野瀬千代蔵校長を表彰(貯蓄局長賞)している。

もう一つは、下小川婦人会の取り組みである。

奥久慈下小川婦人会では二十八日第一国民学校に小室支部長以下全役員参会して航空戦力増強特別貯蓄運動に関し打合せ、小室支部長より『苛烈な航空決戦に敵の物量を撃擯する途は早く一機でも多くの飛行機を送ることです、前線に血の叫びを聞くのはわたし達婦人の責任です、早く沢山の飛行機を送つて兵隊さんに応へませう—』と激励すれば並みのお母さんは皆身をふるはして『そうだそうだ』と答へた、割当られた貯蓄額を手にして、この二倍も三倍もの特別貯蓄を固く誓ひ合つて六百余名のお母さん達は今月末までには千二百六十円突破へ明日から嬉しい貯蓄戦の火蓋を切ることになつた(後略)(昭和一九年一月二十九日付茨城新聞夕刊)

まさに「老幼男女の差別なく」粉骨砕身、貯蓄増強に精励する「御奉公」の日々であつた。(齋藤典生)

『編集後記』今年度から大金祐介さんが大子町歴史資料調査研究員に就任されました。新たな発想のもと、これまで培われてきた歴史研究の成果を、本誌はもとより多分野でいかななく発揮されることと思ひます。読者の皆様、どうぞご期待ください。

### 編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生(大子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也(大子町歴史資料調査研究員)

大金 祐介(大子町歴史資料調査研究員)

神長 敏(大子町教育委員会事務局)

大金 真理子(大子町教育委員会事務局)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

☎ 0295(72) 1148

発行日 二〇二三年(令和五)六月一日